

群 教 セ	G02 - 02
	令5.284集
	社会 - 小

# 進んで他者との交流を重ね、 自分の考えを広げ深めようとする児童の育成

— 「まとめる」過程におけるサブテーマの設定と相手の考えを受け取ることを意識した交流活動を通して—

特別研修員 安達 学

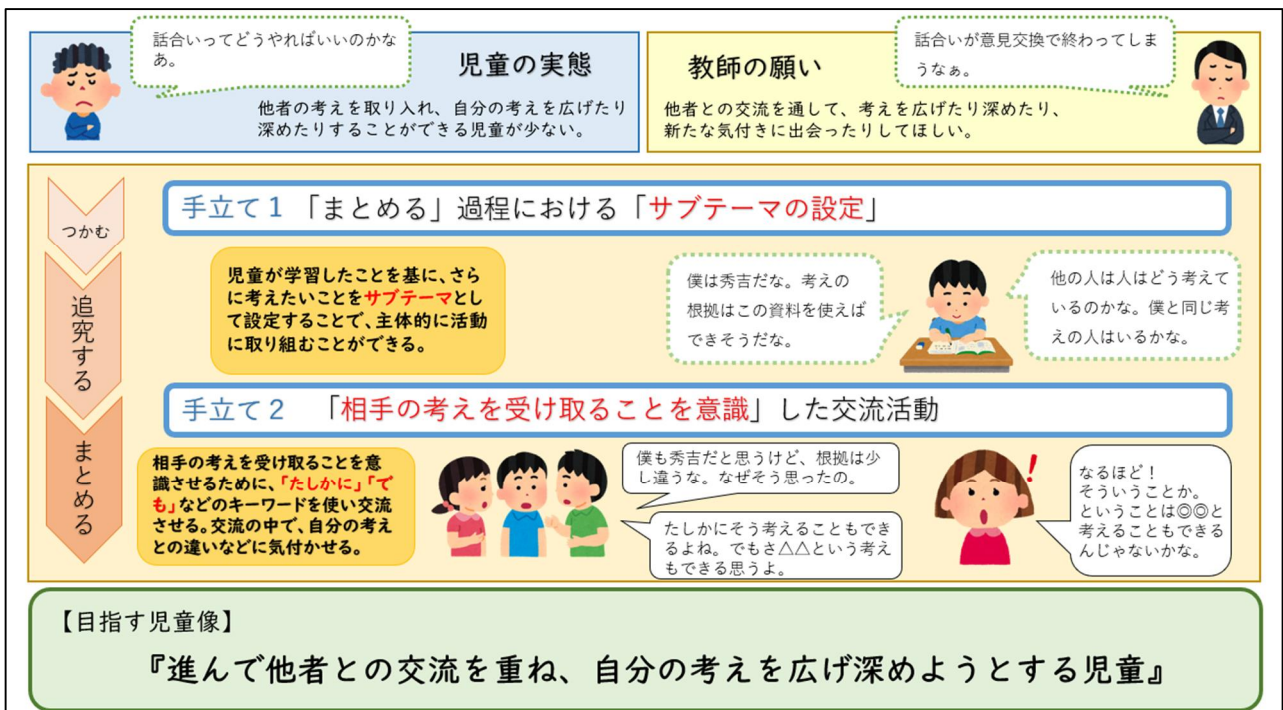
## I 研究テーマ設定の理由

『小学校学習指導要領（平成29年告示解説 社会編）』には「対話的な学び」について、「話し合いの指導が十分に行われずグループによる活動が優先し内容が深まらない」といった課題が指摘されている。また、群馬県教育委員会から示された、令和5年度学校教育の指針・社会科の授業改善のポイントでは「諸資料から読み取れる情報を根拠とし、社会的事象の意味や意義、特色や相互の関係を多面的・多角的に考察したことや、社会に見られる課題の解決に向けて考えたことについて、他者と語り合う活動を設定しましょう。」とあり、学んだことについて交流を通して共有し合い、考えを広げ深めることの重要性が求められている。

研究協力校（以下、協力校）では、進んで他者と関わろうとする児童が多い。しかし、話し合いが意見交換にとどまってしまい、交流を通して自分の考えを広げたり深めたりすることができる児童は少ない。そこで、「まとめる」過程におけるサブテーマを設定し、相手の考えを受け取ることを意識した交流活動を重ねる手立てを講じることにした。交流の中で児童は、自分の考えと他者の考えの共通点や相違点に気づき、そこから自分の考えを再構築することで更に考えを広げたり深めたりすることができると考え、上記のようにテーマを設定した。

## II 研究内容

### 1 研究構想図



## 2 授業改善に向けた手立て

自分の考えを広げ深めようとする児童を育成できるように、次のような手立てを用いた。

手立て1 「まとめる」過程におけるサブテーマの設定

手立て2 相手の考えを受け取ることを意識した交流活動

手立て1の「まとめる」過程におけるサブテーマの設定とは、単元の課題とは別に、学習した内容をより深く理解するための手立てである。単元の課題を解決した後に、それまで学んだことを更に多面的・多角的に捉えるために、どんなことについて話したいか、振り返りの中でサブテーマについて児童自身に考えさせる（図1）。その振り返りを基にクラス全体で一つサブテーマを決め、自分の立場を明確にしながら根拠をもって話し合い活動に取り組めるようにしていく。児童が根拠をもって話し合いに取り組めるようにするために、二人の武将の行って

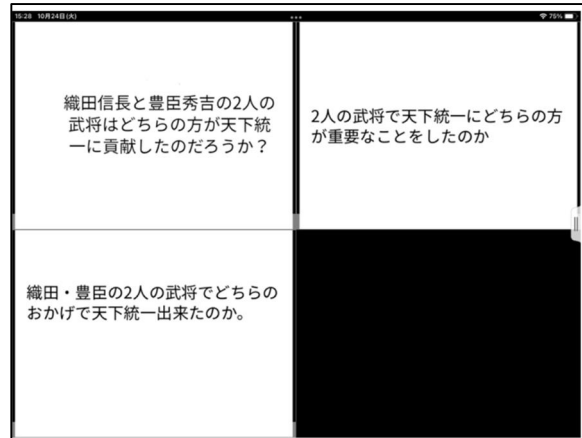


図1 児童の振り返り

きた政策一つ一つに点数を付ける。効果が大きい程点数が高くなるように設定し、1～10点を付けるようにした。点数を付けることで、合計点等を基に自分の立場を明確にすることができる。また、同じ武将を選んだ場合でも、付けた点数の違いを話し合うことで、様々な考えに触れることができる。

手立て2の「相手の考えを受け取ることを意識した交流活動」とは、共感的に受け取る時には「確かに」「なるほど、他にも〇〇という考え方もできるよね」などの言葉を使い、批判的に受け取る時には「でも」「そういう考えもあるけど」などの言葉を意識して使うことで、聞き手は自分との考えの違いに気を付けながら聞いたり、相手の意図を考えながら聞いたりすることになる。また話し手は、聞き手からの問い返しやアドバイスなどを通して、自分の考えを再構築することにつながる。

## Ⅲ 研究のまとめ

### 1 成果

- サブテーマを設定したことによって、既習内容を基に自分の考えをもち、その考えを伝えようと積極的に他者と関わり、解決しようとする姿が見られた。
- 自分の考えの根拠となる資料を既習の内容や、自分がまとめたノートから選び、説明する姿が見られ、聞く相手に対しても説得力のある対話できた。
- 相手の考えを受け取ることを意識しながら交流することで、ただの意見交流で終わるのではなく、受け取った意見から自分の考えを更に深めようとする姿が見られた。

### 2 課題

- 設定した話し合いの時間を、同じ相手と続けてしまうことがあった。交流する相手を更に増やすためには、時間等で区切り、より多くの考えに触れる工夫を考える必要がある。

## 実践例

### 1 単元名 「戦国の世から天下統一へ」（第6学年・2学期）

### 2 本単元

本単元は、戦国大名の群雄割拠の状態から、豊臣秀吉が全国統一をした頃までの学習である。まず、「多くの戦国大名がいた中で織田と豊臣がなぜ天下統一できたのか」という疑問をもたせ、単元の学習課題を設定する。「追究する」過程では、戦い方をどのように工夫したのか、どのような政策をどのような意図で進めていったのかなどを考え、既習事項と結び付けて考えて考察したり、理解を深めたりする学習を行う。「まとめる」過程では、単元の課題をまとめた後、社会的事象を多面的・多角的に考え、更に理解を深められるようにするためにサブテーマを設定して話し合い活動を行う。

以上のような考えから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	(1) 世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などについて、地図や年表、その他の資料で調べ、キリスト教の伝来、織田・豊臣の天下統一を理解できるようにする。 (知識及び技能) (2) キリスト教の伝来、織田・豊臣の天下統一を関連付けたり統合したりして、戦国の世の統一に果たした織田信長、豊臣秀吉の役割を考え、適切に表現できるようにする。 (思考力、判断力、表現力等) (3) 学習課題の解決に向けて粘り強く、主体的に追究、解決しようとする態度を養う。 (学びに向かう力、人間性等)	
評価 規 準	(1) 世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などについて、地図や年表、その他の資料で調べ、キリスト教の伝来、織田・豊臣の天下統一を理解している。 (2) キリスト教の伝来、織田・豊臣の天下統一を関連付けたり統合したりして、戦国の世の統一に果たした織田信長、豊臣秀吉の役割を考え、適切に表現している (3) キリスト教の伝来、織田・豊臣の天下統一について、予想や学習計画を立てたり、学習を振り返ったりして、学習問題を追究し、解決しようとしている。	
過程	時間	主な学習活動
つか い	第1・2時	<ul style="list-style-type: none"> <li>天下統一に向けた動きについて、諸資料を見て気付いたことや疑問に思ったことなどについて話し合い、学習課題を設定する。</li> </ul>
学習課題：織田信長と豊臣秀吉はどのように天下を統一していったのだろうか。		
追 究 す る	第3時	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本が、外国とどのように関わっていたのかを、諸資料を基に調べる。</li> </ul>
	第4・5時	<ul style="list-style-type: none"> <li>織田信長が天下統一に向けてどのようなことを行っていったのかを諸資料を基に調べる。</li> </ul>
	第6・7時	<ul style="list-style-type: none"> <li>豊臣秀吉が天下統一に向けてどのようなことを行っていったのかを諸資料を基に調べる</li> </ul>
ま と め る	第8時	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元の学習課題を、今まで学習してきたことを基にまとめる。</li> <li>振り返りを通して、多面的・多角的に捉えるため、更に考えたいこと・話し合いたいことについて意見を交流する。</li> </ul>
	第9時	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">           サブテーマ：信長と秀吉、天下統一により貢献したのはどちらだろう。         </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>前時に出た意見から本時のサブテーマを設定する。</li> <li>サブテーマについて話し合い、自分の考えを広げたり、深めたりする。</li> </ul>

### 3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全9時間計画の第9時に当たる。これまでの学習で「織田信長が戦い方を工夫したり、楽市楽座などの経済政策をしたりしながら勢力を伸ばしたこと」「豊臣秀吉が検地や刀狩りなどの政策を行ってきたこと」「ザビエルによってキリスト教が伝来したこと」などを学習してきた。本時は、今まで学習してきたことを更に多面的・多角的に捉えるための話し合い活動である。まず、前時の振り返りを全体で共有し、話し合いたいサブテーマを確認する。次に、二人の武将が行ってきた功績や政策の一つ一つに点数を付けさせ、それをサブテーマに対する自分の立場の根拠とする。1人1台端末や大型モニタを活用し、自分や他の児童と立場を共有しながら話し合いをすることを通して、自分の考えを広げたり深めたりしていく。手立てについての具体的な内容は、次のとおりである。

#### 手立て1 まとめる過程におけるサブテーマの設定

学習課題のまとめをした後、「単元のまとめとして、更に考えたいことは何か、話し合いたいことは何か」という視点で振り返りを行う。その振り返りをICT機器を活用して全体で共有し、話し合いのサブテーマを設定する。児童の振り返りの中からサブテーマを設定することで、児童が主体的に活動に取り組むことが期待できる。

#### 手立て2 相手の考えを受け取ることを意識した交流活動

相手の考えに対しては共感的に受け取る場合には「なるほど」「確かに」などのキーワード、批判的に受け取る場合に「でも」などのキーワードを使い、更にそのキーワードの後に自分の考えを伝えることを意識しながら聞くことで、聞き手は自分との考えの違いに気付く。また話し手は、聞き手からの「なぜ」等の問い返しやアドバイスなどを通して、新たな考えを取り入れたり、自分の考えを再構築したりしていく。更に、児童はこの話し合い活動を通して、社会的事象を多面的・多角的に捉えることができ、自分の考えが広がったり深まったりすることにつながる。

## 4 授業の実際

### (1) 手立て1 「まとめる」過程におけるサブテーマの設定

前時では「単元のまとめとして、更に考えたいことは何か、話し合いたいことは何か」という視点で振り返りを行った。本時の導入では、その振り返りを大型モニタやタブレットなどのICT機器を活用して共有し、その中から児童は「信長と秀吉、天下統一により貢献したのはどちらだろうか」という話し合いのサブテーマを設定した。児童には話し合いのサブテーマに対して今まで学習してきたことを根拠としてどちらかの武将を選ばせた。その際に、二人の武将が行ってきた功績や政策の一つ一つに点数を付けさせた(図2)。点数を付けさせた理由として、自分の考えの根拠となる政策等を明確にするねらいがある。また、同じ政策であっても児童によって付けている点数が異なることもあり、なぜその点数にしたのか、自分が付けた点数と比較し、その違いについて話し合うことで、他の考えに触れるために有効な手立ての一つとなった。

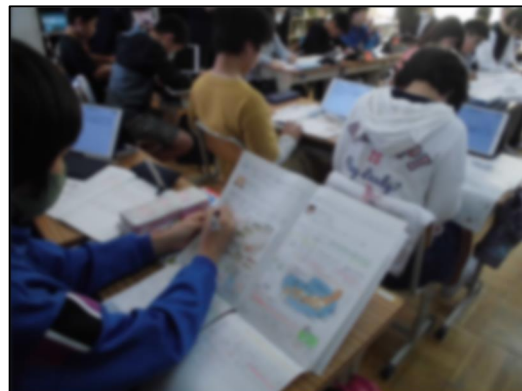


図2 政策に点数をつけている様子

### (2) 手立て2 相手の考えを受け取ることを意識した交流活動

話し合いの場面では、まず必要感をもって取り組めるようにするために、話し合うことよさ(「たくさんのお考えに出会える」「自分の考えをパワーアップさせることができる」など)について全体で確認した。そのためには、意見交換で終わらないようにするために、キーワードを意識しながら交流活動をする大切さを共有し、交流活動を行った。その中で児童は、「確かに信長の政策の楽市・楽座によって商売が盛んになっているね。」「でも秀吉が行った検地も年貢を確実に取るために大切だよ。」「そう

いう考えもあるけど、私は信長がいなかったら秀吉の政策はなかったと思う。」など相手の意見の後に必ず自分の考えを伝える様子が見られた。相手の考えを受け取ることを意識しながら聞くことにより、児童は自分の考えとの共通点や相違点に着目しながら聞くことができた(図3)。また話し手は、聞き手からの問い返しやアドバイス、批判などを通して「確かにそう考えると、信長の政策は大切だった。」「確かに秀吉の政策は天下統一には欠かせなかった。」などと、自分の考えが変化していることに気付く姿も見られた。最後にもう一度サブテーマについて考えることによって、交流した結果を踏まえ自分の考えを見直し、より説得力のある考えにしようとする姿も見られた。振り返りでは、「天下統一するにはどんなことが必要か」ということについて書かせたが、交流を通して信長・秀吉の政策について考えが深まった記述が見られた(図4)。



図3 進んで他者と関わる様子

<p><b>ふり返り</b></p> <p>天下を統一するには、どんなことが必要だと思いますか。</p> <p>戦いに勝って天下統一するだけではなく、秀吉の兵農分離や、信長の楽市楽座など、民衆のことを考え、天下統一することが大事だ。また、武力だけではなく、頭を使った戦い方をすることも大切だと思う。</p>	<p><b>ふり返り</b></p> <p>天下を統一するには、どんなことが必要だと思いますか。</p> <p>武力、権力はもちろん必要ですが、自分の健康を管理したり、資金を調達するために商業都市を支配し、人の出入りを増やしたり、国民のために行動し、国民からの納得、信頼も必要だと思います。</p> <p>信長だけ、秀吉だけでも天下統一は絶対にできなかったと思います。信長は武力と頭脳で、秀吉は権力と国民への想いで2人とも天下統一にとても貢献したと思います。</p>
---	---

図4 児童の振り返りの一例

## 5 考察

手立て1の「『まとめる』過程におけるサブテーマの設定」では、児童の振り返りの中から話し合いたい内容を設定したことで主体的に取り組むことができた。また、自分の立場を決定する根拠はこれまで学習してきた内容であり、学習してきた単元全体を振り返ることにつながった。今までの学習と違い学習のまとめとしてサブテーマを設定したが、児童の反応もよく、学習内容の整理にもつながる効果があったと感じる。これからも、児童が考えたいような魅力あるテーマ設定を考えていきたい。

手立て2の「相手の考えを受け取ることを意識した交流活動」では、社会科に関わらず、他の教科でも行ってきた。「確かに」や「でも」などのキーワードを使い、その後に自分の考えを伝えることを意識することで、聞き手は自分の考えと共通しているところはあるか、自分の考えと異なるところはどうなところかを常に意識しながら聞くことにつながった。相手の考えに対して意見を言う、自分の考えに対して意見をもらう活動は、自分の考えを広げ深めることに有効であった。本時の学習においても他者の考えを取り入れ、自分の考えを再構築する姿が見られた。

本研究を進めていく中で、話合いの場面では「なんでそう思うの?」「でもそれだと・・・」「確かにその考えはいいと思うけど・・・」「もっと話し合いたい」と、積極的に相手の考えを聞こうとしたり、相手の考えを聞いて自分の考えと比較したりするなど、徐々に児童の変容が見られるようになってきた。話合いを通して進んで他者と関わり合い、自分の考えを広げたり深めたりしようとする姿につながったことは、大きな成果であったと考えられる。これからも授業改善に取り組み、児童が主体的に取り組む授業のスタイルを模索していきたい。